

## 二度目という幸運

先日、学生時代に読んだ遠藤周作氏の『彼の生きかた』という作品を久しぶりに読み返した。テレビの動物愛護番組を見ていて急にこの作品が本棚の隅にあったことを思いだしたからである。学生時代生物学を勉強していたこともあり、動物好きの友人に勧められて読んだという記憶がある。言葉に障がいを抱えた主人公が人間と上手く接することができず、唯一心を許せる野生の猿と通じ合いながら孤高の人生歩むといった内容だと思い込んでいた。しかし改めて読み返すと描かれていたのは単なる動物と人間の心のふれあいの物語だけではなかった。ささやかな幸せさえ許さない社会の理不尽さ、自然保護の理想は経済発展の前に無力となってしまう現実が様々なエピソードを交えながら細やかに描かれていた。記憶とは時間と共に興味ある部分しか残さないようになっているようだ。二度目の読書は、長い人生経験を経て初めてその描かれている良さがわかることを教え、また学生時代の様々な出来事まで思い出させてくれた。

映画でも似たような体験がある。これも学生時代に小さな映画館で見た『アラビアのロレンス』という作品。記憶に残っていたスケールの大きなテーマ曲が車のラジオから流れてきたことがあり、懐かしくなってさっそくDVDを購入し見直してみた。オスマン帝国からのアラブ独立闘争を描いた作品であるが、映画館で見た当時はどうやって撮影したのかと思うような美しい砂漠のシーン、主人公ロレンスと強い友情で結ばれるアラブ人アリが蜃気楼の彼方から現れるカットなしの長いシーンだけしか記憶になかった。その内容はもちろん、中東の歴史についても当時は関心がなかったため、音楽以外はほとんど忘れていた。約四時間に及ぶ長い作品ではあるが、今回は全く退屈せず一気に見入ってしまった。強く印象に残っていた美しい砂漠の風景よりも、大英帝国やアラブの国々に尽くすものの、やがてどちらからも疎まれ、翻弄される一人の英国人の波瀾万丈な人生に引き込まれた。改めて見直す経験は、この作品の新しい魅力に気づく機会となったが、同時になかなか結果が出ない研究に疲れ切った時、ほぼ逃避するような気持ちで友人とこの作品を見に行ったことも思い出した。

これまでの人生では最初の感動を大切にしたいと思い、一度読んだ本には再び手をのばさずにきた。映画も一度見た作品については、見た事実を人に話して知ったかぶりして

過ごしてきたように思う。だから二度目の経験というものはそれほど価値あるものと思っていなかったのがこれまでの自分であった。しかし、今回のこの二つの出来事は、二度目だからこそ気づくことや、これまでの人生の中で様々な経験を積んだからこそ理解できるものがあることを教えてくれた。現在は誰もがインターネットやスマホなどを使って広い世界の出来事を自分の知識や経験とすることができる。しかし時々、そのような便利なものはなかったが、狭い世界しか知らないくせにさも知っているかのように背伸びして過ごした学生時代が無性に懐かしくなる。ゆっくり流れる時間の中でこんな生活がいつまで続けられるのかという不安を抱えながら、本や映画に浸っていた昔の自分を思い出す。今、二度目の読書や映画に新鮮な魅力を感じている。作品の本当の良さと共に、一度目の経験当時の出来事を懐かしく思い出せる機会になるのが楽しみになっている。

フランスの作家マルセル・プルーストに『失われた時を求めて』という作品がある。主人公が紅茶に浸ったマドレーヌの味と香りから幼少期の様々な体験を思い出す場面から始まる長い長い物語である。香りが過去の記憶を引き出す現象を「プルースト効果」と呼ぶらしいが、脳に蓄積された多くの記憶は五感を通じてふいに呼び起こされるものらしい。私の場合はテレビやラジオの映像や音楽がきっかけとなり、昔見た作品につながり、若かりし学生時代の懐かしい様々な出来事まで思い出させてもらえた幸運に出会えた。作品の新しい魅力や価値に気づく機会に出会えた。

一本の線を何回もなぞるとその線が太くなるように、同じ作品を何度もなぞればその作品の良さが新たに見えてくることがある。また何度もなぞっているうちに線を描いていた当時のことまで思い出すことがある。何を豊かな人生と感じるかは人それぞれだと思うが、思い出すことが多い方が楽しい人生だと思う。これからも若い頃に読んだ小説や映画をもっと見てみようと思っている。